

# 住民として、相談員として

門馬 麻衣子<sup>a</sup>, 安東 量子<sup>b</sup>

<sup>a</sup> 末続地区放射線相談員、福島県いわき市久之浜町末続、979-0331; e-mail: [mmaiko0504@gmail.com](mailto:mmaiko0504@gmail.com)

<sup>b</sup> 福島のエートス、福島県いわき市田人町、974-0151; e-mail: [ethos.fukushima@gmail.com](mailto:ethos.fukushima@gmail.com)

**要旨**-2011 年の東京電力福島第一原発事故の発災時に、私は 2 人の子供と夫と一緒にいわき市に住んでいました。自宅は津波で被災、その後の原発の状況悪化を受け 2 年間の避難生活を送り、いわきに戻ってきて、その後、いわき市の末続地区で放射線相談員として働くこととなりました。地域の人たちの暮らしを尊重しながら、測定とコミュニケーションを続けた経験をお話しします。

キーワード: 末続、原子力事故、福島のエートス、福島、放射線防護

## 1. 震災時からいわきに戻るまで

2011 年 3 月 11 日の東日本大震災では、津波による被害もありました。地震から津波による被害、そして、原発事故、矢継ぎ早に急変する状況に翻弄されることとなりました。

### 1.1. 節: 被災、そして、避難

2011 年 3 月 11 日震災時はいわき市四倉町の自宅で夫と当時 2 歳の息子、0 歳 10 か月の娘と暮らしていました。海から数百メートルの自宅は津波の被害に遭い、自宅近くの高台の避難所に 5 日間避難しました。その後東京電力福島第一原子力発電所の事故が起きたことを知り、当時子供たちが小さかったこともあって、自宅近辺は避難指示は出ていませんでしたが、市外への自主避難を決めました。最初は知り合いのつてを頼り、福島県郡山市に 2 か月ほど避難しました。その後、自分の生まれ育った仙台に母子だけで避難し 2 年ほど暮らしました。避難の間、家族と何度も相談し、最終的に、いわきでの生活基盤を整えるため、子供たちが小学校に上がる前に戻ってきました。

### 1.2. 節: 避難中の生活、放射能について学ぶ

母子での自主避難は、シングルマザーと同じ状況での生活となり、子育てが最も大変な時期であることに加え、放射線についてどのように判断すればよいか分からなかったことで、より放射線を危険なものとする考え方に傾いていきました。心に余裕がなくなり、子育てにも悪影響を及ぼしてきたことを感じ、なるべく感情に訴えてこないデータを中心に、放射線についての勉強を手探りで始めました。新聞やテレビで報告される放射線量の日々のデータを確認しつつ、ガイガーカウンターを使って生活空間の放射線量を測り、現状を理解した上で過去に起こった原発事故と

福島で起こった事故の規模の違いを自分なりに比較し、自分で考えながら制限していた行動を徐々に広げていく、そういうことをやっていました。

## 2. 末続の相談員としての活動

### 2.1.:末続地区の放射線相談員になる経緯

いわきに戻ってしばらくして、すでに末続で放射線測定活動をしていた「福島のエートス」の安東さんに誘われ、活動に加わることになりました。2015年1月から2017年3月まではいわき市から末続地区への委託事業で、2017年4月から2020年3月までは「福島のエートス」による環境省の研究事業の一環として、放射線の測定とその結果を共有する活動が末続地区で行われ、私は放射線相談員として活動することになりました。避難中に手探りで勉強していたときには、とても孤独を感じたこともあり、末続での活動では、皆で話し合いながら、地元の方たちが自分のペースで放射線のこと、自分の不安な気持ちと向き合い、受け入れる場所にできるのではないか、そのために自分に何か役に立てることがあれば、と思ったことが理由です。

### 2.2:相談員としての仕事

#### 2.2.1 外部被ばく測定

私たちの活動では、外部被ばくを測定する積算型個人線量計 D シャトルを使用し、個人線量を測定し、結果の分析やグラフによる住民への説明会を行いました。専門家として福島県立医科大学の宮崎真先生にデータ解析や説明をお願いしました。宮崎先生はいつも末続に来るわけではないので、住民の方への細かな説明は私が行って、わからないことは宮崎先生に問い合わせるといったコミュニケーションのつなぐ役割をしました。

宮崎先生は個人線量のグラフの下部にバックグラウンドの線、上部に年間追加被ばく 1mSv のラインを引いて、自分たちの個人線量が年間を通し、その間にほぼ収まることを視覚的に説明しました。個々の生活と個人線量がリンクすることが、グラフを見るだけで難しい専門用語を使うことなしによくわかることが大きな特徴だったと思います。

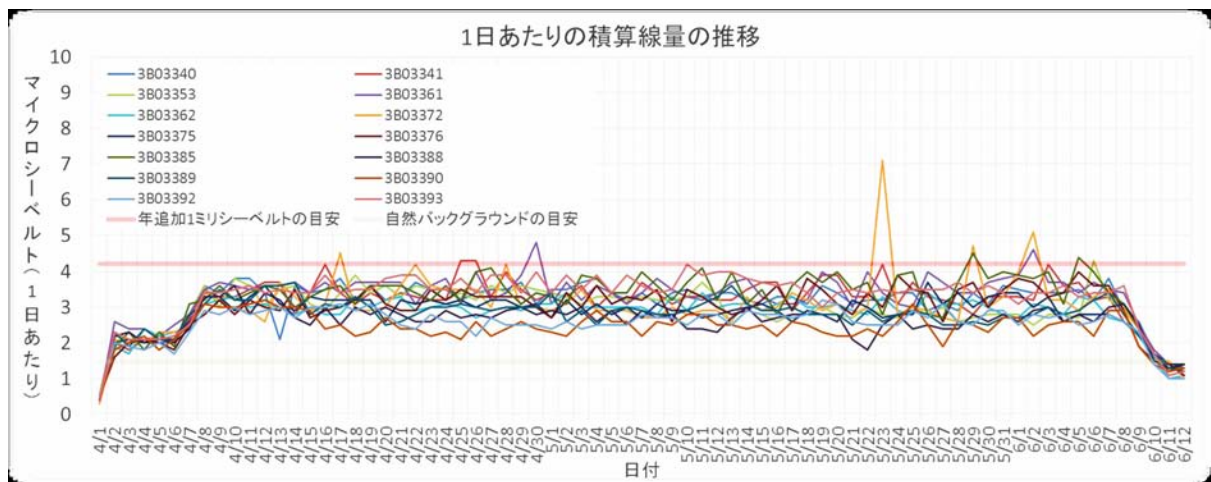


図 1. 2014 年 4 月から 5 月にかけての末続地区の 15 台の個人積算線量計 D シャトル（千代田テクノル）を用いて測定した外部被曝の結果（作成：福島県立医科大学 宮崎真）

## 2.2.2 食品測定

私の主な仕事としては、週に一度、末続地区の集会所で行なっていた食品測定を担当することでした。測定した農産物の 1 kg あたりの放射能を結果を見ながら説明するのですが、1 kg 当たりでの放射能であること、そこから、普段はどのくらいの量の食品を口にするのかということ、ヒアリングしながら具体的にイメージしてもらうようにしていました。

食品測定は、年数が経過するうちに、通年で継続的に持ち込む人数は減りましたが、傾向として、旬の野菜や果物等を持ち込む人数に関しては目に見えて減ってはいませんでした。個人的な感触として、自分の生活に密着している、あるいは思い入れのある農作物については、折に触れ測定しておきたいという希望を持っている方がいるという実感があり、非常に印象的でした。具体的には、みかんや、干し柿にするための渋柿など、ある時期にしか採れない果物です。それは、その食品が自分の生活に対する充足感と大きく繋がっているからではないかという気がします。食品の放射線水準を確認することによって、放射線量や安全性を知るだけでなく、自分の生活の価値の再確認をしているように思えました。

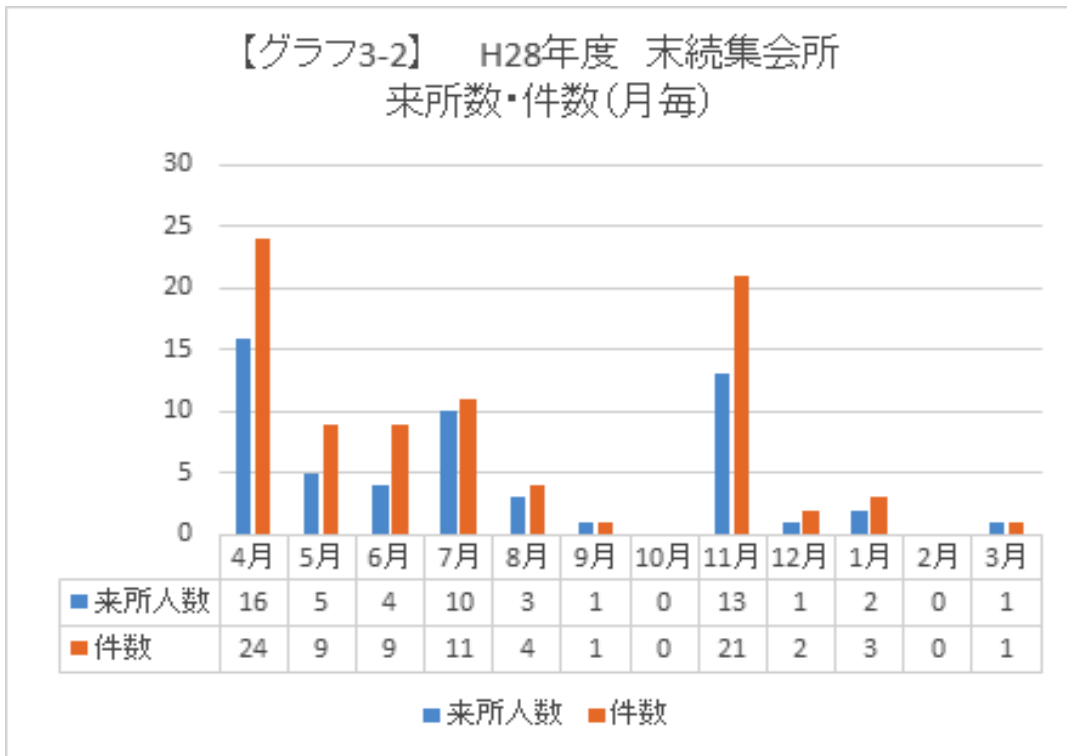


図 2. 末続地区の 2016 年度の食品測定来所人数と持ち込み件数。

平成29年度 末続地区食品測定 来所数・件数

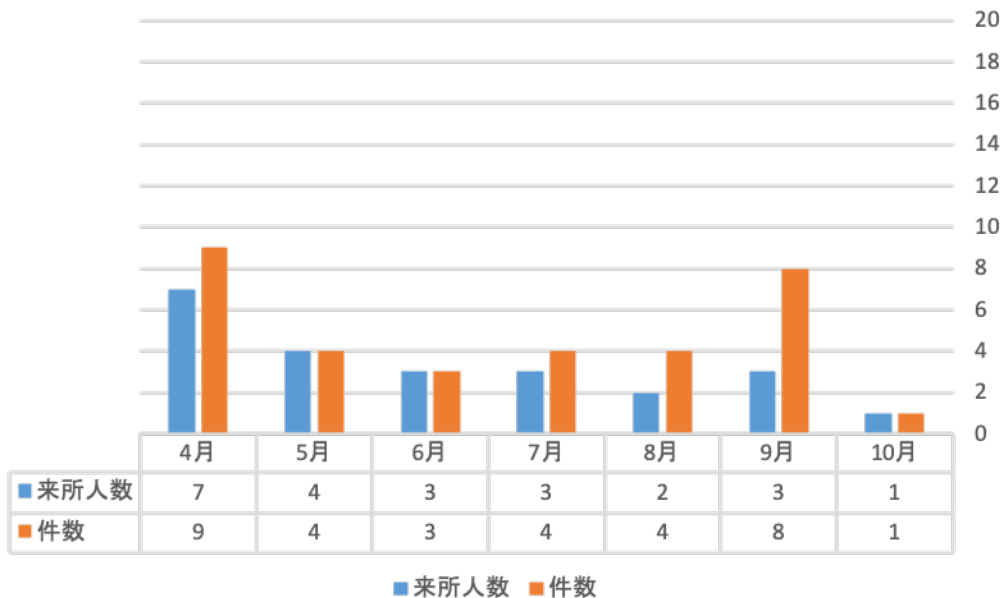


図 3. 末続地区の 2017 年度の食品測定来所人数と持ち込み件数。

測定するにはそれぞれ理由があると思いますが、その人の様々な想いが見えるような気がしました。例えば、みかんが採れるお宅では、たくさん採れた年には遠

方に暮らすほかの家族に毎年送ることが楽しみだという話から、原発事故後は送ることを控えていたけれど、測定をして問題のないことが分かり「自信を持って小さな孫にも食べさせられる」という方もいました。はじめのころは放射線のことをとても不安に思っていた方が明るい笑顔で話されたのが印象的でした。

### 2.2.3 「すえつぎだより」の発行

また、3か月に一度の頻度でニュースレター「すえつぎだより」を作成していました。「すえつぎだより」では、放射線の測定結果も掲載し、地域の住民全体で結果を共有できるようにしました。こうすることによって、宮崎先生の話聞きに来られない人でも状況がわかるようになりましたし、わざわざ食品測定に足を運ばなくても、地域の食品の放射線状況も知ることができるようになりました。

時間の経過とともにDシャトルの個人線量の測定は終了するなど活動内容の変化はありましたが、食品測定の活動と「すえつぎだより」の作成は約5年間ずっと続けてきました。

「すえつぎだより」では、私は主にインタビュー記事を作成していました。毎回おひとりに平均して2時間ほどお話を伺っていました。どなたも発災当時の出来事は時間が経過しても鮮明に記憶しているのだろうという感触を持ちました。平常の暮らしに戻ってきてからの暮らしぶりは、末続という共同体の基盤があるからこそその経験談や、それぞれの人生観がにじむようなお話を聞いたことが印象に残っています。

避難によって大家族がそれぞれ離れて暮らすようになった寂しさ、地域から子供が少なくなった話、そうした状況でも次世代に末続の豊さを残したいと奮起するようになった方や、地元の若い世代が放射線の対策に頑張っている姿を見て勇気づけられたといった話など、年代は様々でしたが、明るいだけでも暗いだけでもない、人生の途中で突然降ってわいたような原発事故から、それぞれに再起していったと思える話をたくさん聞くことができました。

## 3. 相談員としての活動で学んだこと、伝えたいこと

### 3.1. :測定することの意味、相談員としての心構え

結果をそのまま伝えるだけであれば、機械がはじき出す数字を示すだけで事足ります。なぜそれを測定したいのか、その食品がその人にとってどんな意味を持つのかということ雑談の中で関心を持ちつつ聞くようにしました。なぜなら、食生活は自分や家族の生活に直結しており、生活や人生のクオリティを大きく左右するものだからです。放射能による汚染という現実からどのようにして食生活、つまり生活の基盤を取り戻すのか、その食物に関わる思いを聞くことなしに測定をしても無意味だと思いました。

そして、気負わずに測定にかかわり続けました。私がなんとしても放射線について理解してもらおうと気張れば、相談に来た人に無用のプレッシャーを与えてしまい、小さな疑問を口にしてもらえないだろうと考えたからです。個人的には10年は時間をかけようと思っていました。これが私が地域に受け入れてもらえた一番の要因かと思います。私自身も肩の力を抜いて、雑談を通して人生の先輩

に、子育てや家事についてなどの相談をさせてもらったり、井戸端会議のような雰囲気壊さないようにしていました。だから、地域の人たちも抵抗なく測り続けることができたのだと思います。

また、ニュースレターの作成においては、後年は住民の方から話題提供やエッセイ記事の提供を受けるようにもなり、「すえつぎだより」を楽しみにしてくれている方がいるという実感がありました。

平成29年12月20日発行 第9号

# すえつぎだより

広島大学の院生が今年も  
来ました

8月28・29日、放射線災害からの復興を担う国際的に活躍できる人材を育成するために設けられた、「広島大学大学院フェニックスリーダー育成プログラム」の学生と指導教官らが末続を訪れ視察を行いました。

28日、震災と原発事故以降の放射線防護に関する末続独自の取り組みを、当事業の安東量子、福島大学宮崎真先生そして高木宏区長が説明を行い、学生からの質疑応答の時間が設けられました。午後には、いわき市除染対策課の職員の案内で除染廃棄物の仮置き場を見学、高木区長の案内で津波被災跡地を訪問。完成なった海岸堤防や河川堤防の復興状況の様子を見学しました。

編集  
安東量子  
鈴木伴栄  
門馬麻衣子



末続駅で高木区長の説明に聞き入っています

翌29日には、末続集会所で食品測定の実演を見学したほか、末続住民との対話集会も行われました。



お昼ご飯を食べながら学生さんとの対話。

この「フェニックスリーダー育成プログラム」は、海外、発展途上国からの留学生も多く在籍しています。末続の方からは、「海外に福島の本場の状況を伝えてほしい」との声も出て、学生たちは「自分の国でも伝えていきたい」と応じていました。

後日、広島大学の教員からは、視察を終えてから、学生の学習意欲が目に見えて変わった、驚くほどの前向きになったと聞きました。ご協力いただいた皆さま、ありがとうございました。

### 3.2. :末続の活動の特徴

末続における私たちの活動で特徴的なのは、住民が常に主体であるという姿勢を堅持し続けたことにあると思います。住民の人が「こうしたい」という意思を尊重し、外部からの支援者である私たちが意見を押し付けることはしませんでした。また、地域の人たちの暮らしや関係の中に、土足で踏み込むようなこともしないように気をつけました。専門家は専門家として、相談員は相談員として、住民の方から相談があれば助言し、測定について「一緒に」考えるようにしました。

住民からの質問などでわからないことがあるときに、相談員が必要以上に専門家然として専門用語を使って放射線への説明をする必要はありません。わからないものはわからないと伝えること、また、その後専門家に相談し、わかったことを伝えるアフターフォローを適時しっかりやるという姿勢が最も住民から信用されるのではないかと思います。

支援者は、あくまで部外者です。部外者がサポートとして地域で活動するためには住民からの信頼を得ることが一番重要になると思います。地域に関わろうとする私たちが、同時にそれぞれの立場を崩さず真摯に事に当たるやり方を地道に継続することが、信頼を得ながら長期に活動することを可能にしたのではないかと思います。

## 4. 終わりに

震災、福島第一原子力発電所の事故よりまもなく10年になろうとしています。10年間の末続の歩みについては、参考文献にあるように、ビデオや論文としてまとめられています。住民の目から見た放射能や専門家、測定といったものがどうだったのかがよくわかると思います。専門家の皆さんにもぜひご覧いただきたいと思います。私たちの活動は、長い時間をかけて地域の人たちのたくさんの努力、そして協力してくれる人たちの助けによって進めることができました。どんな風に何を行って来たのか、詳細は論文をぜひご覧ください。

## 5. 参考文献

- 1) R. ANDO; Measuring, discussing, and living together: lessons from 4 years in Suetsugi, *Ann. ICRP* **45**(1S), 75-83(2016).
- 2) CHIYODA TECHNOL ; Specifications of D-shuttle. Available at : <http://www.c-technol.co.jp/eng/e-dshuttle>, Accessed 10 November 2020.
- 3) R. ANDO; Reclaiming our lives in the wake of a nuclear plant accident, *Clin. Oncol.*, **28**, 275-276(2016).
- 4) R. ANDO; Trust \_ what connects science to daily life, *Health Phys.* **115**, 581-589(2018).
- 5) ETHOS IN FUKUSHIMA; Regaining confidence after the Fukushima accident: the story of the Suetsugi community, (also available in Japanese and French) Available at: [https://youtu.be/L\\_ZhjixM6oM](https://youtu.be/L_ZhjixM6oM), Accessed 10 November 2020.
- 6) J. Lochard , R. Ando, H. Takagi, et al ; The post-nuclear accident co-expertise experience of the Suetsugi community in Fukushima Prefecture, *Radioprotection*, **55**(3), 225-235(2020)